

氏名	長 弘 千 恵
授与した学位	博 士
専攻分野の名称	医 学
学位授与番号	博甲第 3069 号
学位授与の日付	平成18年3月24日
学位授与の要件	医歯学総合研究科社会環境生命科学 (学位規則第4条第1項該当)
学位論文題目	健常高齢者の入浴時における浴室温が循環動態に及ぼす影響
論文審査委員	教授 大江 透 教授 成瀬 恵治 助教授 光延 文裕

学位論文内容の要旨

わが国では入浴時の死亡事故が多く、その85%以上が高齢者である。浴室温が入浴者の循環動態に与える影響に関する先行研究の多くは低い室温に注目しており、また高齢者を対象とした研究は少ない。本研究では、高齢者における比較的高い浴室温が入浴時の循環動態に及ぼす影響を明らかにするために、20℃および27℃の室温を選び、これらの室温が湯温41℃における入浴時の循環動態に与える影響を検討した。

重症な呼吸・循環器疾患を合併していない高齢者14人を対象に、20℃と27℃の室温のもとで41℃の中温浴を合計2回してもらった。どちらの室温で入浴するかの順序は無作為に割付けた。入浴中および入浴後安静臥床時の血圧、脈拍、pressure-rate product (PRP、収縮期血圧値と心拍数の積)、酸素飽和度、鼓膜温、気分および温度感覚を20回計測し、2つの室温の間で比較した。

結果としては、室温27℃では20℃に比べて、鼓膜温の上昇がより顕著で、入浴後の血圧低下が大きく($p<0.05$)、出浴後に酸素飽和度が低い傾向があった($p<0.05$)。27℃と20℃の間では入浴中および入浴後の気分の変動には有意な差がなかった($p>0.05$)。

以上のことから、健常高齢者においては、室温20℃、27℃の入浴はともに安全な入浴と考えられ、室温27℃の入浴の方がより好ましい血圧降下作用を得ることができると考えられた。

論文審査結果の要旨

本研究は、高齢者の入浴における浴室温の循環動態に対する影響を検討したものである。浴室温20℃と27℃の比較調査結果は、安全性では両者とも問題が無かったが、血圧降下作用は27℃の方がより効果的であった。本研究は、従来十分確立されていなかった高齢者における浴室温の循環動態に対する影響に関して、重要な知見を得たものとして価値ある業績であると認める。

よって、本研究者は博士(医学)の学位を得る資格があると認める。